

## 若い人へのメッセージ・先端技術とは

(元)ハドロン輸送研究グループ 中原 康 明

1960年に私が大学の物理学科を卒業した頃は、大学では未だ原子力の正規の講義は行われておらず、学会では日本として原子力開発にどう取り組むべきかをめぐって賛否両論が渦巻いていたように思う。一方、物理研究全体も転換期にあり、私としては方向を掴みかねていた。

そこで新天地を求めて東海村にやって来た次第であるが、そこは正に村という名にふさわしく、喫茶店一つない田舎であった。しかし、所員の間には新しい研究所を作るという熱気があった。指導者もいなかった代わりに、年齢差を越えた同志的連帯と切磋琢磨があった。このような研究環境の中で私なりに体験したことを若い人へのメッセージとして書き記してみたい。

### 良い研究者になるということについて

研究活動の出発点は好奇心である。まず、好奇心が旺盛であることが良い研究者になることの基本的条件となる。さらに研究者として成長して行くためには、研究の勘所を掴む能力をいかにして鍛えるかが問題になる。やはり重要なのは、一流の研究者、研究グループとの出会いである。特に若い時期における出会いが重要である。1960年代における久保亮五、森肇両先生との出会いがその後の私の研究活動を決定付けた。私が非平衡統計力学を学び得たのは、両先生とその周囲の若き研究者達との討論を通してであった。

ここで注意しなければならないのは、グループの中にあっても、そこに埋没せずに、自立心を持ち続けることが重要であるが、日本的組織にあっては、自立心を持つことと協調性がないということが混同されがちだということである。この点においても生意気盛りの若き日の私を見守って下さった久保、森両先生の厳しさと暖かさが懐かしく思い出される。

さらにBNLのH. Takahashiさんとの出会いは、私の研究生生活の後半を決定付けたという点で、重要な

転機となった。私がハドロン輸送研究に本格的に取り組むようになった出発点は、BNLにおける彼との共同研究であった。

### 先端研究を行うということについて

繰り返しになるが、やはり旺盛な好奇心が出発点となる。先人を乗り越えて先に進むには、従来の概念を十分に把握しなければならないが、それに囚われない自由度を保持することが大切である。戦略的思考の大切さも言うまでもない。

### 先端研究とは

当然のことながら、先頭を切って進める研究においては、競争相手がいない。一般的には、熾烈な競争が行なわれていると思われているようだが、私の体験では、世界各地のライバル的存在の人達とは絶えず連絡を取り合いつつ、むしろ互いに支え合ってきたといえる。

また研究成果の正当な客観的評価を行なえる第三者的存在がなく、先頭を歩む者は非常に孤独である。そのため孤独に耐えるタフさが要求される。しかし、唯我独尊になったら、進歩は止まることに要注意。本質を突いた研究であれば、必ず理解者、支援者を得ることができる。唯、残念なのは、先ず外国で認められてからようやく日本で認められるという傾向が未だに続いていることである。少なくとも先端基礎研究センターは世界に先駆けて真っ先に成果を正当に評価できる存在であって欲しいと思う。

特に、若い人は、自分の専門分野に閉じこもっていないで、他分野の人と積極的に付き合っていて欲しい。指導的立場にある人には若い人の意欲を阻害することのないようお願いしておきたい。

最後にアメリカ人がよく使う言葉を紹介しておきます。

Splendid! Excellent! Very good!